

# 第30期広島精神分析セミナー予定表

■ 時間はいずれも**10:00から15:40**までの予定です (昼休憩 12:20~13:20)

\* 講師および講演内容は、一部予定変更となる場合がありますので、予めご了承下さい。

| 日程              | 講師   | テーマ   | 内容  | 参考文献  |
|-----------------|--|---|---|---|
| 2024年<br>10/20日 | <b>衣笠 隆幸先生</b><br>(日本精神分析協会元会長、<br>広島精神分析医療クリニック院長)                    | ■10:00~15:40 講義<br>『 <b>イドと自我</b> 』<br>『 <b>夢解釈</b> 』                                   | イドと自我：フロイトの重要な論文を中心に、その歴史的視点を解説します。そして現在までの展開を述べます。<br>夢解釈もフロイトの重要な貢献です。その歴史的展開と、現状を解説します。  | フロイト「イドと自我」1923、<br>「夢判断」1900 特にイルマの夢分析の章   |
| 12/22日          | <b>飛谷 渉先生</b><br>(大阪教育大学保健センター教授)                                      | ■10:00~15:40 講義<br>『 <b>フロイトのグラディーヴァから考える現代トラウマ臨床：考古学から精神分析へ</b> 』<br>『 <b>思春期の病理</b> 』 | 前半では、フロイトの「グラディーヴァ」がもつ精神分析史における意義について探究します。この物語を、トラウマの疎隔化から妄想形成を経て夢見の回復へと至る分析的プロセスとみなす読みを試みます。後半では、最近の私の論考「心的生命論」を元にした思春期理解を共有し、「自分の心は本当に生きているのか」という漠たる疑念をめぐる現代の思春期病理について考えます。  | フロイト,S.:「W.イェンゼン著『グラディーヴァ』における妄想と夢」フロイト全集9所収,岩波書店<br>飛谷 渉 (2021):エディプス・マターズ——現代クライン派臨床理論から考える心のインフラ,思想1168:95-117,岩波書店.<br>飛谷 渉:新しい思春期:「私は誰なのか」から「私は本当に生きているのか」へ.,精神分析研究Vol.68(1),pp.46-55,2024                     |
| 2025年<br>1/19日  | <b>浅田 護先生</b><br>(浅田心療クリニック院長)   | ■10:00~15:40 講義<br>『 <b>治療経過と終結</b> 』<br>『 <b>ねずみ男</b> 』                                | 午前は、精神分析あるいは精神分析的な精神療法の「治療経過と終結」について「治療的变化」という視点から講義する。午後は、フロイトの強迫神経症の症例「ねずみ男」について。この症例報告は、重度の強迫症状でさえも、ヒステリー症例で試みて成功したものと同じ技法をもちいて分析的治療が可能であること証明した。面接記録が公表されているので、フロイトが用いた実際の技法を知ることができる。とともに、この症例を通じて、フロイトによる分析治療の実際の「治療経過」と「終結」についても検討してみたい。 | 浅田護 (2017). 重症例の治療的变化と治療の成立.精神分析研究61(2)<br>Strachey, J. (1934). The nature of the therapeutic action of psychoanalysis. Int. J. Psycho-Anal., 15:127-159.<br>フロイト,S. (2009). 強迫神経症の一例についての見解 (症例「鼠男」).岩波書店(10),2008 |
| 2/9日            | <b>皆川 英明先生</b><br>(紙屋町こころのクリニック院長、<br>広島市精神保健福祉センター前所長)                | ■10:00~15:40 講義<br>『 <b>本能論</b> 』<br>『 <b>シュレーバー</b> 』                                  | 前半はフロイトのシュレーバー症例に関する論文を再読し、彼が精神病の機制をどう考えていたのかわり返ってみます。後半は本能論について検討します。フロイトについては快-不快原則から生と死の欲動へと至る流れを解説します。またクラインについては知識本能、死の本能と超自我、羨望などについて概観します。   | フロイト「自伝的に叙述されたパラノイア(妄想性痴呆)の一症例に関する精神分析的考察」(1911)<br>フロイト「快原理の彼岸」(1920)<br>フロイト「自我とエス」(1923)<br>クライン「羨望と感謝」(1957)  |
| 3/16日           | <b>福本 修先生</b><br>(日本精神分析学会前会長、<br>長谷川病院、さしるメンタルクリニック、<br>代官山心理・分析オフィス) | ■10:00~15:40 講義<br>『 <b>終わりある分析と終わりなき分析</b> 』<br>『 <b>ダ・ヴィンチ</b> 』                      | 前半では、「終わりある分析と終わりなき分析」に関して、そこでフロイトが取り上げている症例の経過と転帰を見直しながら概説する。<br>後半では、「レオナルド・ダ・ヴィンチの幼年期の想い出」を取り上げて、フロイトの「ナルシシズム」概念についても触れたい。   | キノドス著：フロイトを読む一年代順に紐解くフロイト著作 (岩崎学術出版社、2013)  |
| 4/13日           | <b>小林 俊三先生</b><br>(小林メンタルクリニック院長)                                      | ■10:00~15:40 講義<br>『 <b>逆転移について</b> 』<br>『 <b>トーテムとタブー</b> 』                            | 前半は、逆転移の定義、ハイマンの論文の意義とクラインの懸念、いわゆるレベル4の解釈と治療作用との関連から逆転移を捉え直します。後半は、ユングとの理論的・政治的対決から生まれたフロイトの名著「トーテムとタブー」を、エディプス理論と超自我概念の発見の観点から皆さんと読み直してみたいと思います。   | 文献：John Steiner : Lectures on Technique by Melanie Klein.<br>フロイト：トーテムとタブー  |
| 5/18日           | <b>権 成鉉先生</b><br>(クリニックソフィア院長)   | ■10:00~15:40 講義<br>『 <b>心的構造論</b> 』<br>『 <b>米国対象関係論</b> 』                               | 米国の自我心理学を基盤にした対象関係論をカーンバーグの考えを中心に紹介します。また投影同一化についてもこの視点から考察しているホロイツの論考も紹介します。自我心理学の視点から英国対象関係を見直すことで臨床の視点が広がることを目論みます。  | カーンバーグ (1980) Klein派に対する自我心理学からの批判、内的世界と外的現実3章。<br>ホロイツ (2021) グループにおける投影同一化。第四の耳で聴く。7章<br>ギャバード (2014) 力動精神医学の基礎理論。精神力動的な精神医学。2章   |
| 6/22日           | <b>阿比野 宏先生</b><br>(ロンドン医療センター精神科部長、<br>タヴィストッククリニック講師)                 | ■特別講演16:00~20:30<br>(2H症例検討)  | このたび広島でご講演いただけることになりました。現在、英国精神分析協会 精神分析家、英国王立医師会、英国王立精神科医師会精神科精神療法専門医、タヴィストッククリニック講師、ロンドン医療センター精神科部長としてご活躍されております。精神分析の本場英国の第一線でご活躍されている先生のご講演ならびにケースの理解について触れることのできるまたとない機会になっております。  |   |
| 8/24日           | <b>河野 恵理先生</b><br>(ここの脳神経外科クリニック副院長<br>精神科心療内科)                        | ■10:00~15:40 講義<br>『 <b>転移と逆転移</b> 』<br>『 <b>超自我</b> 』                                  | 「転移・逆転移」に関する理解の変遷や「超自我」形成をめぐる理論の展開は、古典的な精神分析から現代クライン派への発展の系譜を示してくれる重要な観点である。今回は、精神分析の軸となるこの2つの概念を歴史的に概観し、どのように現代クライン派へとつながり、生きた臨床として発展していったのか示したい。  | 1.ハイマン「逆転移について」(1950)<br>2.クライン「転移の起源」(1952)<br>3.ローゼンフェルト「急性精神分裂病者の超自我葛藤の精神分析」(1952)<br>4.クライン「精神機能の発達について」(1958)<br>5.プリトン「性、死、超自我」(2003)   |
| 9/21日           | <b>木部 則雄先生</b><br>(こども・思春期メンタルクリニック、<br>白百合女子大学教授)                     | ■10:00~15:40 講義<br>『 <b>内的対象</b> 』<br>『 <b>こどもの分析技法</b> 』                               | 「内的対象」は対象関係論の根幹にあり、特に子どもの精神分析的治療関係で明確に表現され、それはクライン派の基本となった。こうした歴史と実例を踏まえて講ずる予定である。また「こどもの分析技法」に関しては、昨今の時代の流れも踏まえて、治療設定や解釈を中心に講ずる。   | 『 <b>クリニカル・クライン</b> 』<br>『 <b>こどもの精神分析II</b> 』  |